

ユニバーサル・ファッションの追求

— 女性用メモリーベスト実用化に向けての研究 —

和洋女子大学 家政学群 服飾造形学類 菊池祥美

1. 序論

我が国は2007年(平成19年)超高齢社会に突入し、5人に1人が高齢者となり、さらに、2030年には3人に1人が高齢者になると予測され、我が国の高齢化は世界で最も進みが早く、世界一の高齢社会といえる。高齢化社会で問題にあげられる1つは「認知症」増加である。2010年には、認知症患者の数は65歳以上の高齢者の7人に1人であったが、2025年には5人に1人と見込まれており、認知症への理解と、認知症になったとしても向き合う姿勢を広めたいと考えた。本研究では、高齢者の携行品やポケットの嗜好性調査及び、各ツールを着装できる機能を持った女性用ベストの制作と着用評価を通して、認知症や記憶障害を持つ方を対象とした女性用のメモリーベストの実用化について検討を行った。

2. 研究方法

A. 物忘れに関するアンケート調査

①調査:平成28年5月下旬～7月下旬②調査対象者:同居している高齢者やデイサービスセンター利用者(8月1日、2日の2日間訪問)の60歳以上の男女51名。③調査項目:a普段持ち歩いているもの、b置き忘れるもの、c病院に行くとき持つもの、d服についているポケットの使用頻度、eポケットに対する不満、fベスト制作に対する意見。

B. ベスト制作及び着用評価

【試作 I】

①女性用メモリーベストの試作(表地:綿100%、裏地:綿:90%、麻10%。胸外ポケット2、胸内ポケット2、脇ポケット2、後ろポケット3。)②着心地調査:平成28年10月8日、③調査対象者:「もの忘れのある方の懇親会」参加者の中で、同意が得られた女性11名。④調査項目:a着用のサイズ、b服の色の好み、c着やすさ、d動きやすさ、eポケット位置、fポケットの大きさ、g脱ぎやすさ、h色や柄、iベストの形。

【試作 II】

①試作 I の結果を反映した試作 II (表地:綿100%、裏地:ポリエステル 100%。胸内ポケット2、脇ポケット2、後ろポケット3、背中ポケット、名札入れ。)②着心地調査:平成28年10月8日、③調査対象者:60歳以上で、年齢60歳から70歳までの同意を得られた女性5名、④調査項目:上記試作 I での項目に、実際に近所への店に行つての使用感を追加した。

3. 結果及び考察

A. 物忘れに関する現状調査の結果

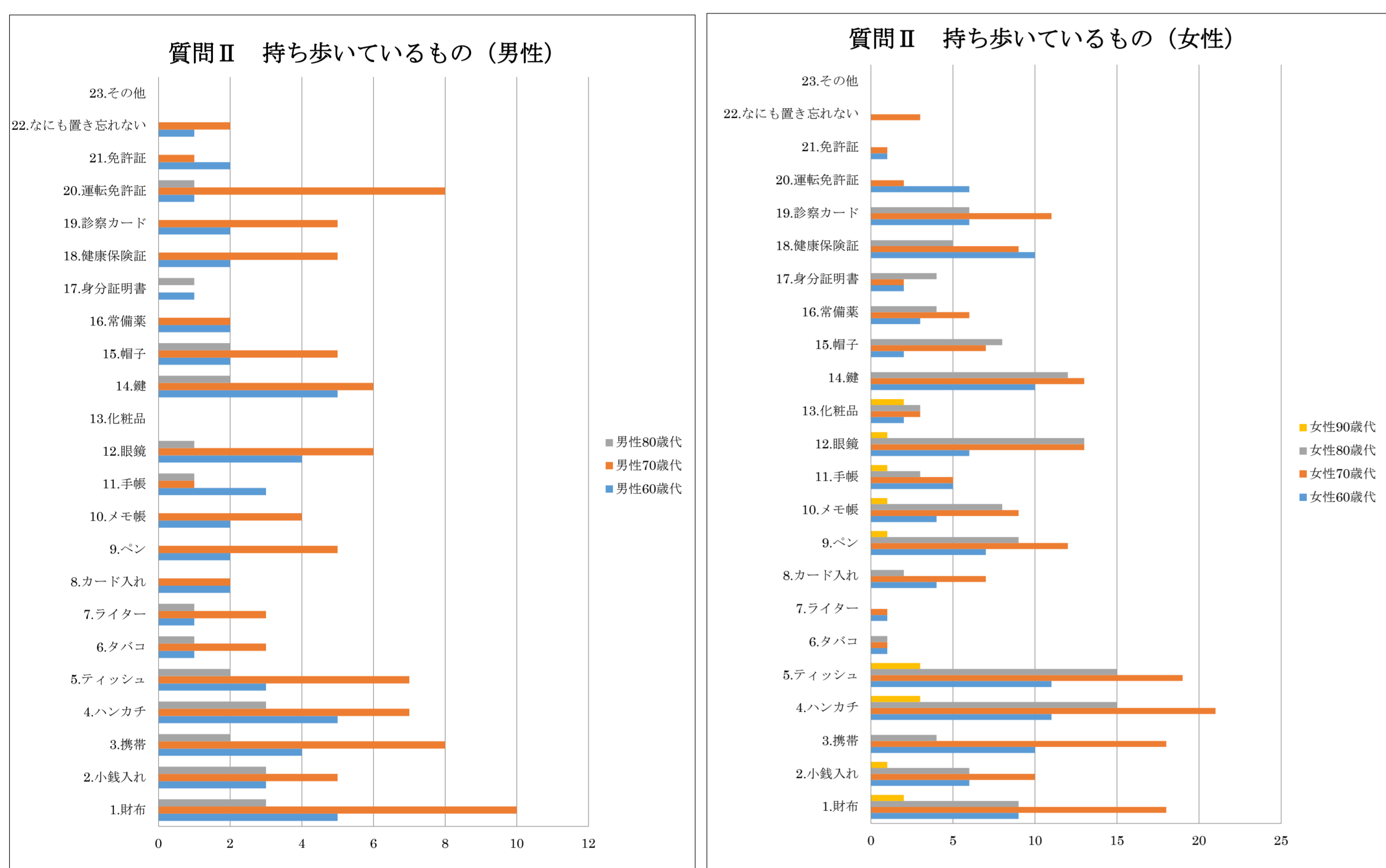


図 1-1 持ち歩いているもの (男性)

図 1-2 持ち歩いているもの (女性)

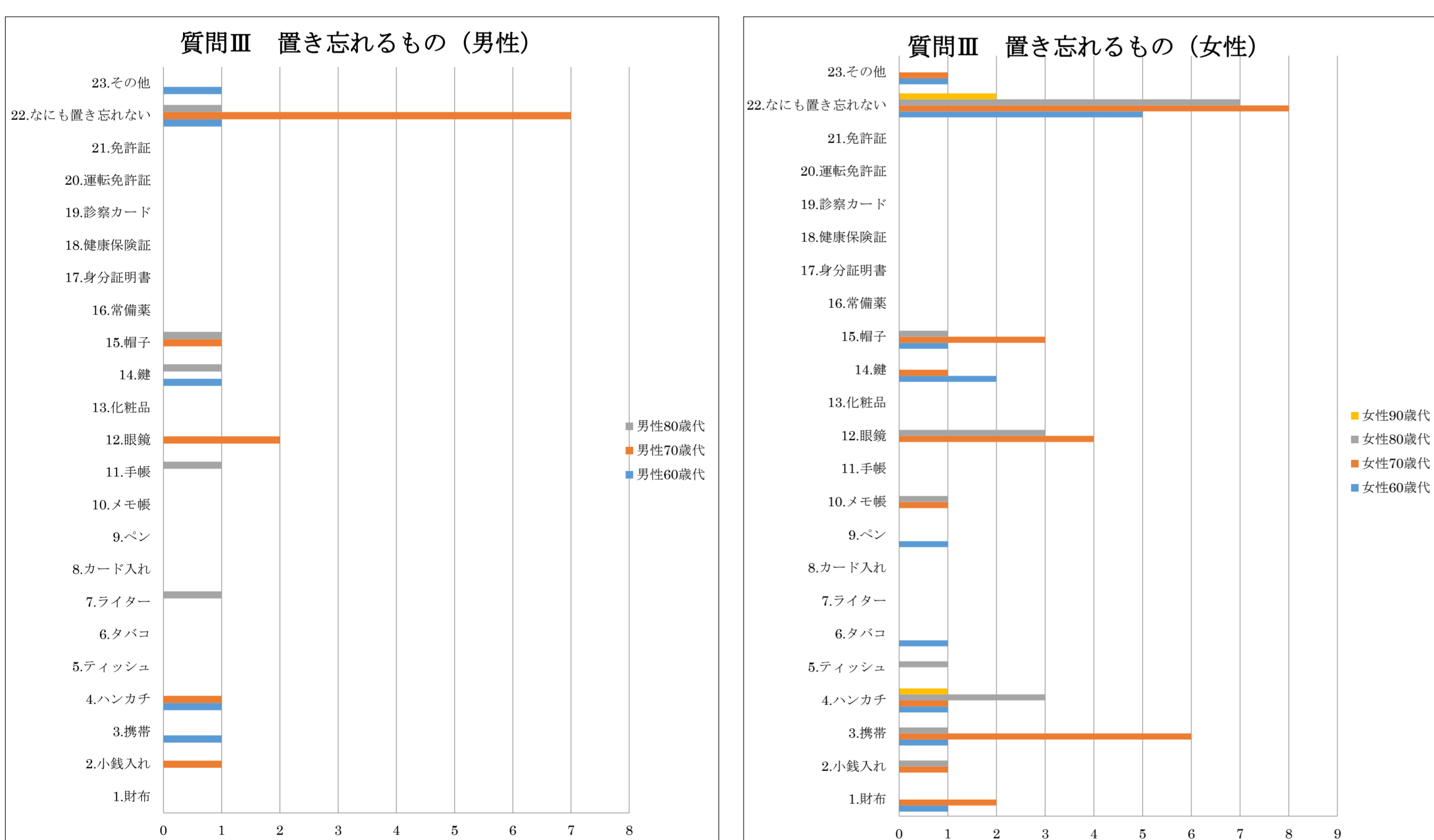


図 1-3 置き忘れるもの (男性)

図 1-4 置き忘れるもの (女性)

2011年に行った調査結果¹⁾では「携帯」の所持率が高い年代は60歳代であったが、今回の調査では70歳代の所持率も高かった。前回調査から5年経過し、当時60歳後半であった団塊世代の男性が70歳代になり、所持年齢が上昇していることが伺われた。この調査に参加した70歳代男性は「運転免許証」と「携帯」の所持数が高く、車の運転や携帯電話を日々使用し、活発な生活をしていると考えた。対して70歳代の女性は、「運転免許証」2名であり、この調査に参加した女性は車を運転しない人が多く、自力で出かけることが少ない、もしくは電車や送迎で出かけると考えた。また、60歳女性は「運転免許証」6人と増え、70歳代女性より運転する人が増えていることから60歳代の方が活発であると考えた。

貴重品である「財布」「鍵」は、2011年の調査結果では「財布」が最も多く、「鍵」3番目であるが、今回の調査では所持率が下がっていた。この調査に参加した女性は貴重品を自分で持たず、家族など付添人が持つ傾向にあると考えた。

「化粧品」所持率は、2011年の調査結果では、80歳代4%、70歳代26%と60歳代13%であったのに対し、今回の調査では、90歳代2名、80歳代3名、70歳代3名、60歳代2名であった。この化粧品所持率が下がっていることから、化粧をする意識が低下傾向にあるのではないかと考えた。

B. ベスト制作及び着用評価

試作 I

【胸内ポケット】位置は前中心から5.5cm、裾から20cmの位置が手が届きやすく操作しやすい事から、不自由さを感じない位置であることが分かった。その他の意見では「深さが欲しい」という意見があった。

【脇ポケット】位置はその他の意見で「脇すぎるので前にある方が使いやすい」という意見が一番多かった。大きさは20cm×10cmが不自由のない大きさであることが分かった。

【後ろポケット】調査の際、実際にA4サイズのものを入れてきた時、ポケットが浅かったため物が落ちやすかった。また、背部と物が接触することで、汗をかいた際に吸収されにくいのではないかと意見があった。大きさをA4サイズ3分の2ほど深くすることで、ファイルが接触されるのを防げるのではないかと考えた。後ろポケットは「脱いでまで着ようとは思わない」、「脱ぐのであればバックを使う方が利便性がある」という意見もあった。

【ポケット全体】前かがみになった時や腰が曲がっている場合を考え、各ポケットに「物が落ちない工夫が欲しい」という意見が多かった。また、何が入っているか分かるように、「名札があると良い」という意見があった。

着用評価から着やすさや動きやすさを改善するため襟ぐりと袖ぐりを広げる。胸内ポケットと後ろポケットの大きさは高さを増やし、物が落下するのを防止する。脇ポケットの位置は、手が自然の入る位置にする。操作性を向上と腰回りのゆとりのため後ろ身頃のダーツをなくし、タックを入れる等が要望された。



図 2-1 試作 I 前

図 2-2 試作 I 内側

試作 II

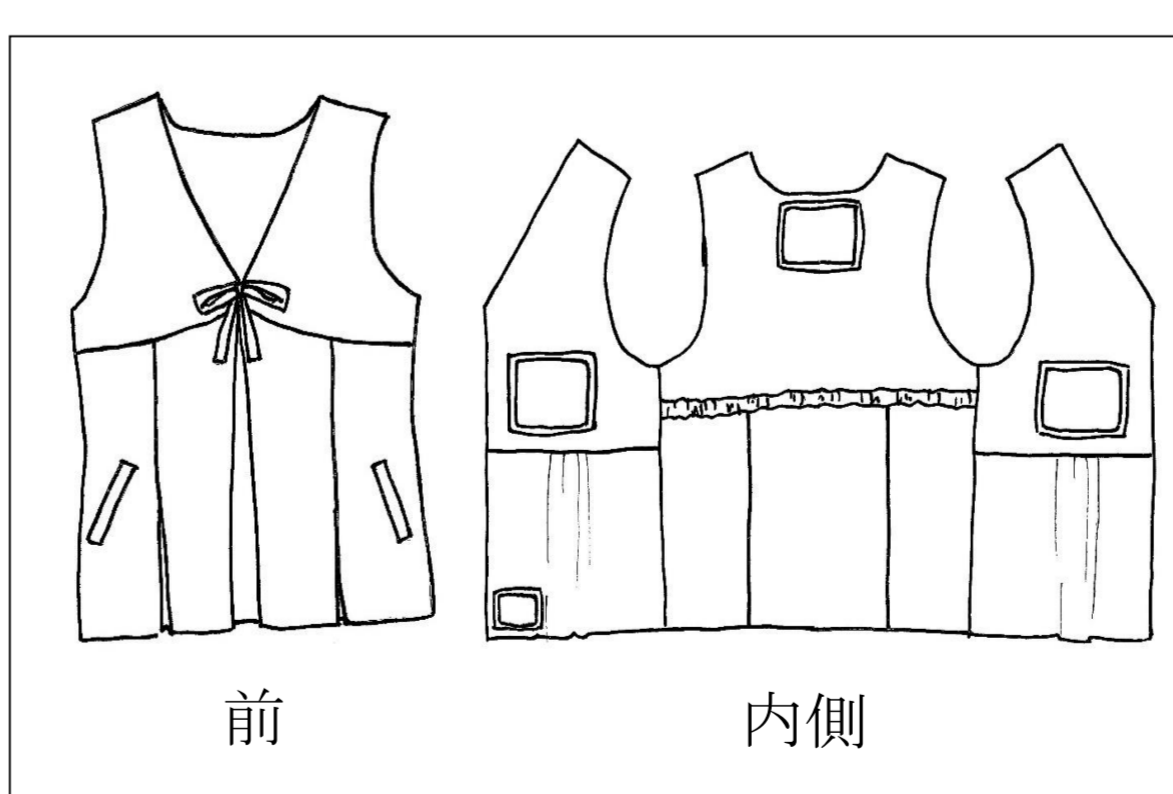
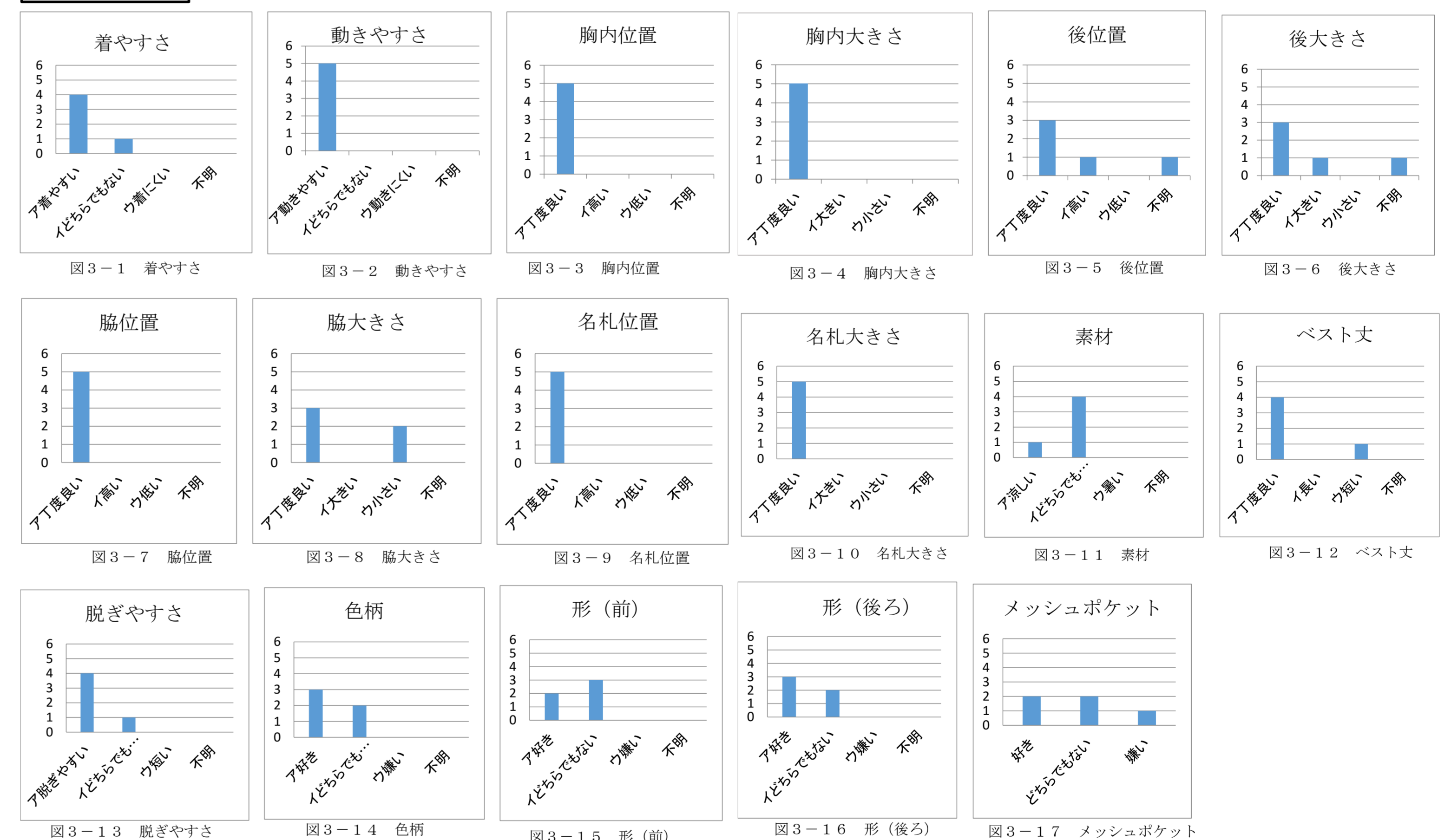


図 4 試作 II デザイン画



図 5 2016年12月31日ベスト着用写真(コンビニへの買い物)

試作 II の着用評価から、背中ポケットと後ろポケットは取り出しにくく、実際に着用しても使用度が低い、物をいれるとデザインに影響が出るのが一番の課題であった。実際に買い物へ行った調査から、女性は必要最小限の持ち物であったとしても、「財布」は大きさや厚み、重さがあるためポケットや見栄えに影響がでることが分かった。

4. 総括

この結果を通して、女性の場合は男性と違い持ち歩くものの数や、大きさが大きくなるためベストでは難しいと考える。ベスト単体ではなく、小さめのかばんと併用したもの、またはメモリーベストと似た機能を持つかばんのほうが需要が得られるのではないかと考えた。また、このような認知症や記憶障害の補助器具は健康なうち、また初期の段階から使用し、使い慣れて記憶しておくことでより活用することが出来る。そのためには、健全なうちから予防する意識を広めていくことが重要であることが分かった。